立教観光学研究紀要　第19号　2017年3月
St. Paul's Annals of Tourism Research No.19 March'17
pp.3-14.

論　文

中国雲南省元陽におけるバックパッカー向け宿泊施設の変容

板垣　武尊

低予算の長期旅行をするバックパッカーの目的地では，巨大な資本を持たない地元住民にバックパッカー向けの低廉な宿泊施設に従事する機会がもたらされると論じられてきた．ところが近年，インターネットのテクノロジーを好む高級志向のバックパッカーが出現し，バックパッカー向けの宿泊施設においても様々な設備やサービスの充実が要求されることや，外部出身者による経営が卓越する事例が報告されている．中国雲南省の観光地はおもに1980年以降にバックパッカーによって発見され，中国雲南省元陽は1992年に対外開放されるとバックパッカーの目的地となった．2000年から2000年代後半にかけては，バスターミナルが位置する新街鎮中心部に，バックパッカー向けの低廉な宿泊施設が集積した．これらは地元出身の漢族が家族・親族で経営している．一方で2010年代以降は，棚田の鑑賞地点である多依樹村（普高老寨）に，設備・サービスが充実したバックパッカー向け宿泊施設が集積した．これらの宿泊施設は，バックパッカーの文化に精通している外部地域出身者が経営しており，地元住民が雇用されている．多依樹にバックパッカー向け宿泊施設が集積した要因は以下の2点である．第一に，2013年の世界遺産登録に伴う交通アクセスの向上である．第二に，バックパッカーの宿泊施設の選択方法が変化したことが挙げられる．新街鎮における宿泊施設は元陽到着後にバスターミナル付近で宿泊施設を探すバックパッカーに対応したのに対し，多依樹における宿泊施設はウェブサイトを通じて宣伝および集客をしている．その結果，元陽のバックパッカー向け宿泊施設では，経営者・従業員および設備・サービスの質における地域的差異が生じた．このように，元陽における宿泊施設はバックパッカーの変化に対応して変容してきた．

キーワード：バックパッカー，ゲストハウス，世界遺産，棚田，元陽

1．はじめに

途上国における観光開発は，ホスト地域に多大な影響を与える．観光開発に伴う負のインパクトとして特に強調されるのは，マスツーリズムである．先進国の資本を必要とするマスツーリズム向けの観光は「新・植民地主義」や「新・帝国主義」と批判され（石森，1996：21），経済的格差を生み出す要因となり（Britton, 1992），ホスト地域に多大な弊害を引き起こすと批判された（安村，2011）．

一方で，バックパッカー（以下BP）は1990年代以降マスツーリズムに変わる新しい観光として注目された．何故ならBPの快適水準は低く，安価で低廉な宿泊施設，飲食店，交通インフラなどを利用するため，巨大な資本を持たない地元住民にそれらの観光産業に従事する機会を与えるからである（オッパーマン・チョン，1999=1997：201-203；Scheyvens, 2002：152）．たとえば，BPが地域に経済効果をもたらすことを支持する事例として，インドネシア（Hampton, 1998，2003）や南アフリカ（Visser, 2003）での研究蓄積がある．

しかしながら，途上国の経済に貢献するとされてきたBP向けの観光開発に対して批判的な指摘もある．横山（2007）は，ラオス・ヴァンヴィエンを事例に，観光地化の過程とBPが地域に与えた影響を論じた．そこでは，観光地化による経済的な利益享受は地元住民に及ばず観光関連施設の

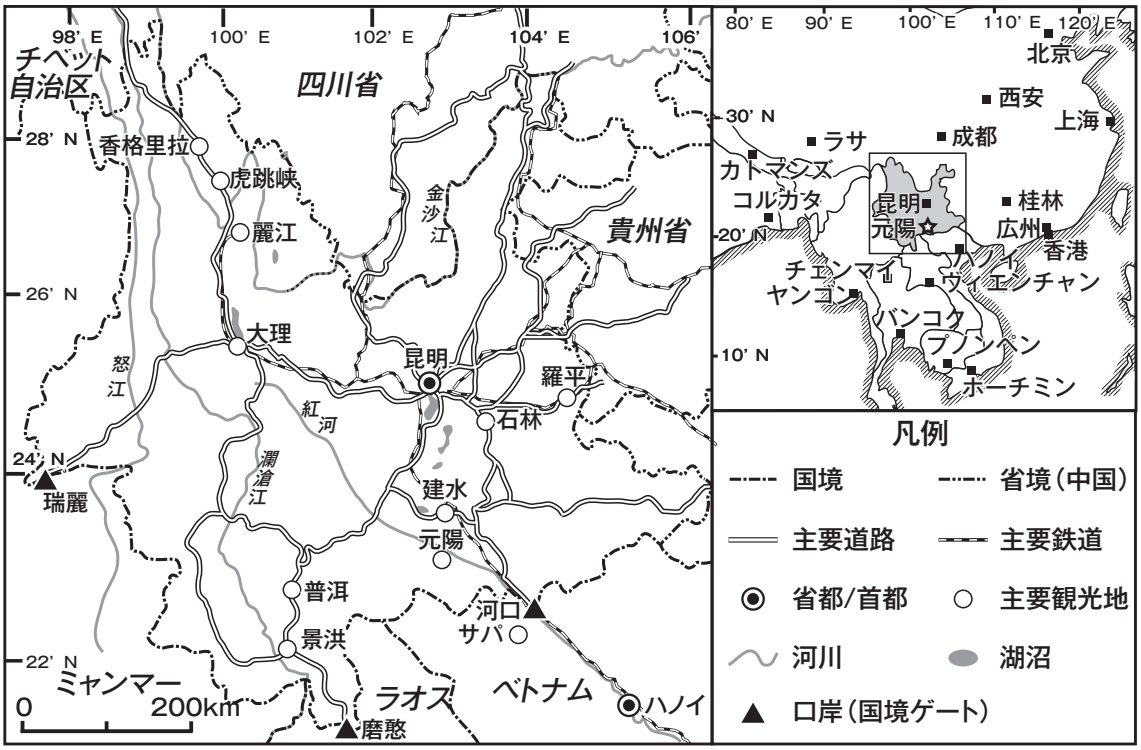

図１　中国雲南省（2015 年）

経営者に限られていたことや，売春や薬物などの弊害が地域に持ち込まれるようになったことを明らかにした．また，Brenner and Fricke（2007）はメキシコ・ジポライトにおける BP 観光の展開を分析した．その結果，観光地化の初期段階には地元住民に観光産業参入の契機をもたらしたものの，観光地化の過程で裕福な BP が流入し，それに対応する外部出身者による BP 向けの観光産業が誕生したとされる．

これらの知見の相違は事例地域の違いによるものであろうか．本研究では BP の質的変化による影響から考えたい．

BP の定義は研究者によって様々であるが，観光者の特性として低予算の長期旅行をすること，他者との出会いを求めることなどが指摘されてきた（たとえば，Locker-Marphy and Pearce, 1995 など）．

それに対し Cohen（2003）は，現代の BP は多様性をもつと主張し，全ての BP を同一概念で論じることに対して警鐘をならしている．また，BP の旅行文化について民族誌的な調査に基づき考察を行った Sørensen（2003）は，現代的 BP の特徴について，インターネットやガイドブックの情報による行動の画一化や，短期間の旅行を行う BP（short-term backpacker）の出現を挙げている．

さらに近年では，flashpacker と呼ばれる予算にこだわらず旅行期間も短い BP の出現が指摘され（Jarvis and Peel, 2010），高級志向であることやインターネットのテクノロジーを好むことが強調される（Hannam and Butler, 2014；O'Regan, 2008；Paris, 2012）．すなわち，従来の BP 向けの快適水準が低い宿泊施設は巨大な資本を有しない地元住民でも参入可能であったのに対し，現代的 BP（flashpacker）向けの宿泊施設ではサービスや設備が要求されるため，資本やノウハウをもった外部出身者が流入すると推察される．ところが，このような BP の変化に伴う BP 目的地の変容については明らかにされていない．

そこで本研究は，中国雲南省元陽における BP

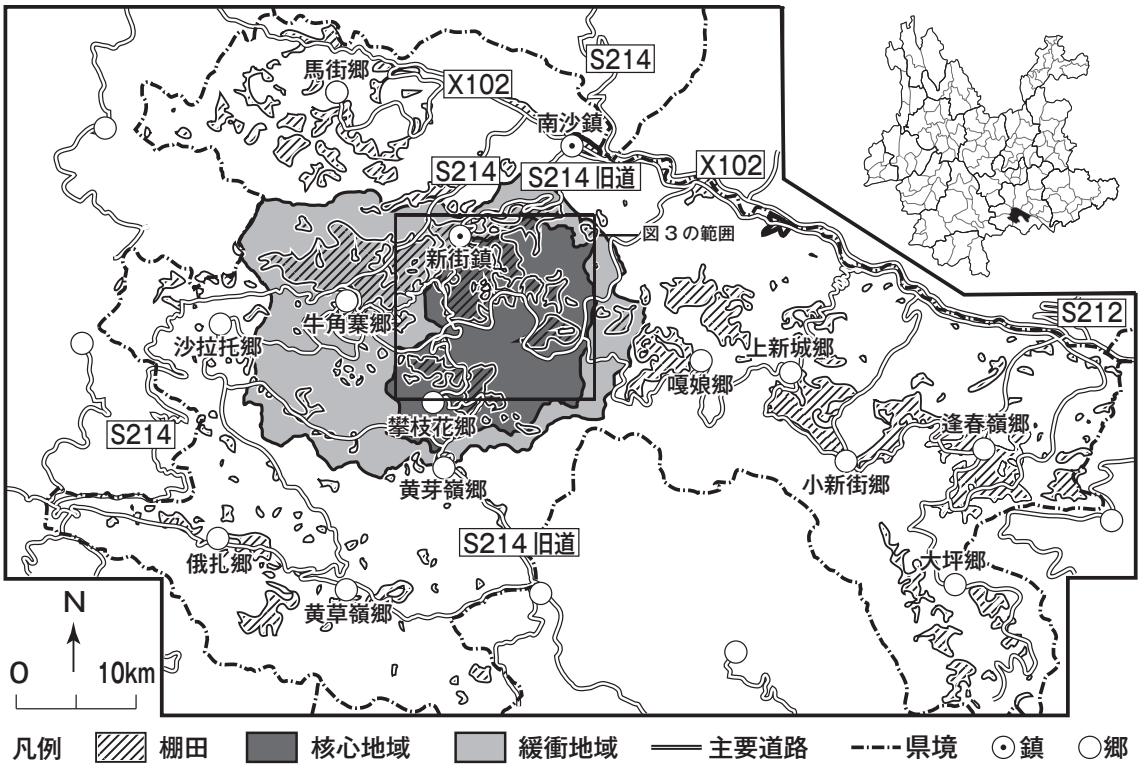

図 2　元陽における棚田の分布と世界遺産の範囲（2015 年）

（図中の黒枠は，図 3 の範囲を示している．棚田の分布は元陽県のみ．道路区分のうち，S は省道，X は県道を指す．世界遺産の範囲は UNESCO のウェブサイトにより作成．棚田の分布は角 (2009) により作成．主要道路・県境・鎮・郷は元陽県政府発行の行政図および百度地図判読により作成．ただし，棚田は 2015 年現在とは異なる可能性がある．）

向けの宿泊施設の変容を明らかにする．特に，立地，経営者と従業員の出身地，BP 向けの設備とサービスなどに留意しながら論じる．

2．現地調査

現地調査は, 2009 年 8 月, 2011 年 2〜3 月と 8〜9 月，2014 年 5〜7 月，2015 年 12 月〜2016 年 1 月に行った．観光施設の分布，棚田および村落の分布，土地利用などを把握するために歩測と Google Earth 衛星画像および「百度」地図判読を行った．宿泊施設および旅行会社に対しては，経営と利用者に関する聞き取り調査を行った．さらに，BP（中国人および外国人）を対象に，旅行の概要と元陽における滞在についての調査を行った．

3．研究対象地域

(1) 雲南省における BP 観光の展開

雲南（Yunnan）省（図 1）は中国南西部に位置し，ベトナム・ラオス・ミャンマーと国境を接している．雲南省では 1980 年代から外国人入域制限が徐々に解除され，飛び地状に発展する民族観光地の開発に BP などが大きな役割を果たした（松村, 2001）．1998 年には雲南省全域が開放され，大理（Dali）や西双版納（Xishuangbanna）の景洪（Jinghong）に BP が集まるようになった．（Donaldson, 2007）．大理では，1983 年の開放直後から BP が来訪し，宿泊施設とレストラン，土産屋などの小規模な観光産業が集積した（Gormsen, 1990）．それらの観光産業は，英語を習得した地元住民によって経営され（Dai and Bao,

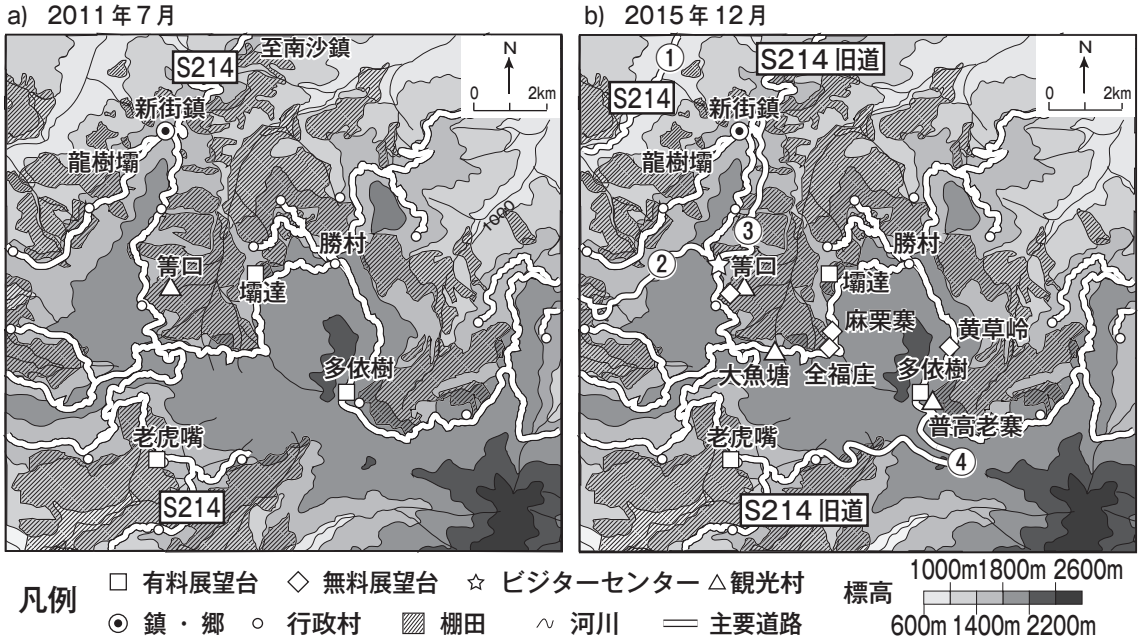

図3　元陽県中央部における観光施設および道路の変化（2011・2015年）

（図3の範囲は図2中の黒枠に示してある．b）図中の数字は，2011年7月～2015年12月の間に開通した新道に冠しており，本文中に説明がある．地形・河川は旧ソ連製10万分の1地形図「ЮАНЬЯН」（1978年発行）により作成．棚田・行政村の分布はGoogle Earth衛星画像判読により作成．観光施設の配置は歩測により作成．2011年7月の主要道路はGoogle Earth衛星画像判読により作成．2015年12月の主要道路はGoogle Earth衛星画像および百度地図判読により作成．）

1996），現在でもForeigner Lane（洋人街）と呼ばれるバックパッカー・エンクレーブが維持されている（Ateljevic and Doorne, 2005）．また，1997年に世界遺産に登録された麗江（Lijiang）でも，開放直後（1985年）に訪れた観光者は数少ない外国人BPであった（王，2009：9）．ところが，2000年以降，BPのたまり場であった大理や麗江に観光者が押し寄せるようになると，観光地化を嫌ったBPの関心はさらに奥の香格里拉（Shangri-La）などに向けられるようになった（須藤，2008：1-40）．

元陽（Yuanyang）は，長い間外部に存在が知られていない辺境の農山村地域であった．しかし，1992年に外国人に開放されると，徐々に観光者が訪れはじめた．開放当時の元陽を訪れる観光者は，カメラマンとBPであった（Vogel, 2003）が，2000年代後半以降はマスツーリストも増加し，現在は両者が混在している．

1995年にフランス人人類学者が元陽を訪れ，棚田文化の世界遺産申請を提言した．1999年から地元政府を中心とした本格的な世界遺産登録に向けた活動が始まり，2004年には中国の世界遺産準備リストに挙げられ（黄，2011=2007），2013年6月には「Cultural Landscape of Honghe Hani Rice Terraces」として世界遺産に登録された．

（2）地域の概観

本研究の対象地域である中華人民共和国雲南省紅河（Honghe）哈尼（Hani）族彝（Yi）族自治州元陽県（以下元陽）は，雲南省南部に位置し，ラオス・ベトナム両国と近接している．2010年の総人口は42.4万で，そのうち農民人口が40.3万，少数民族人口が37.6万である．ハニ族とイ族の他にも，チワン族・ヤオ族など計7族が居住し，民族構成は地域によって異なる．

元陽県は2鎮，15郷から構成されている（図2）．

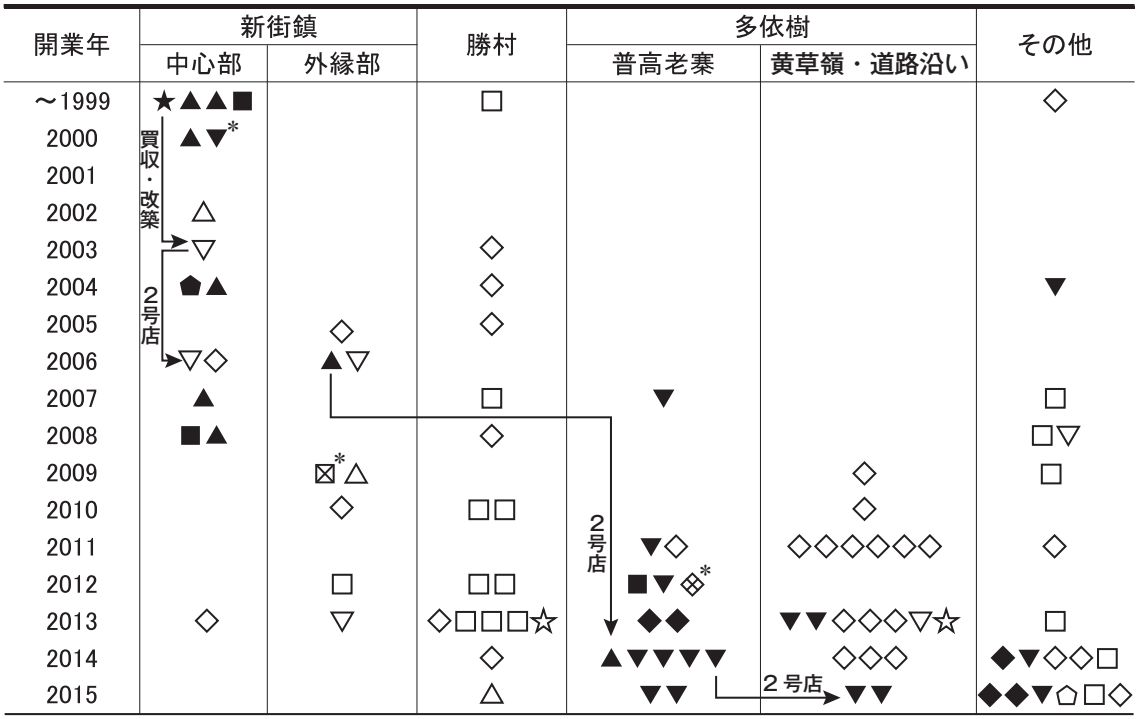

図 4　元陽における宿泊施設の展開

（現地調査により作成．図 3 の範囲のうち 2011・2014・2015 年の現地調査中に営業していた宿泊施設と，現地調査中に知りえた休業・廃業した宿泊施設を記載した．したがって，廃業や再開業した宿泊施設が他にも存在した可能性はある．）

建国以降，新街鎮（Xinjiezhen）が元陽県の中心地だったが，1995 年に南沙鎮（Nanshazhen）がニュータウンとして開発され，行政機関が移転した．ただし，現在でも新街鎮は経済活動の中心地であり，観光者向けの宿泊施設や飲食店が集積している．

元陽県の総面積は 2,190㎢ で総面積の半分以上を森林が占めている．元陽県における棚田の総面積は 116.8㎢，世界遺産の緩衝地帯内における棚田の総面積は 29.5㎢，核心地域内における棚田の総面積は 16.6㎢ で，標高 800 m から 1,800 m の間に分布している．棚田が集中する世界遺産のコア地域は元陽県中央部（図 3）とおおよそ一致し，棚田の展望台，ハニ族のテーマパーク（観光村），ビジターセンターなどの観光施設が集中している．

4．BP 向け宿泊施設の特徴

（1）宿泊施設の展開

元陽における宿泊施設の展開を図 4 に示した．2000 年までは外国人が利用できた宿泊施設は，新街鎮中心部（図 5a）にある政府招待所に限られていた．2000 年以降は政府招待所に加えて，新街鎮中心部に立地する宿泊施設が外国人 BP を受け入れるようになった．宿泊料金は安価で，元陽出身の漢族によって経営されている．

2000 年代中盤から後半にかけて宿泊施設が開業した地域は，新街鎮と勝村（Shengcun）である．新街鎮では，団体ツアー客に対応するための宿泊施設が開業した．また，これまであまりみられなかった少数民族が経営する宿泊施設も開業した．

宿泊施設の立地をみると，新街鎮中心部だけで

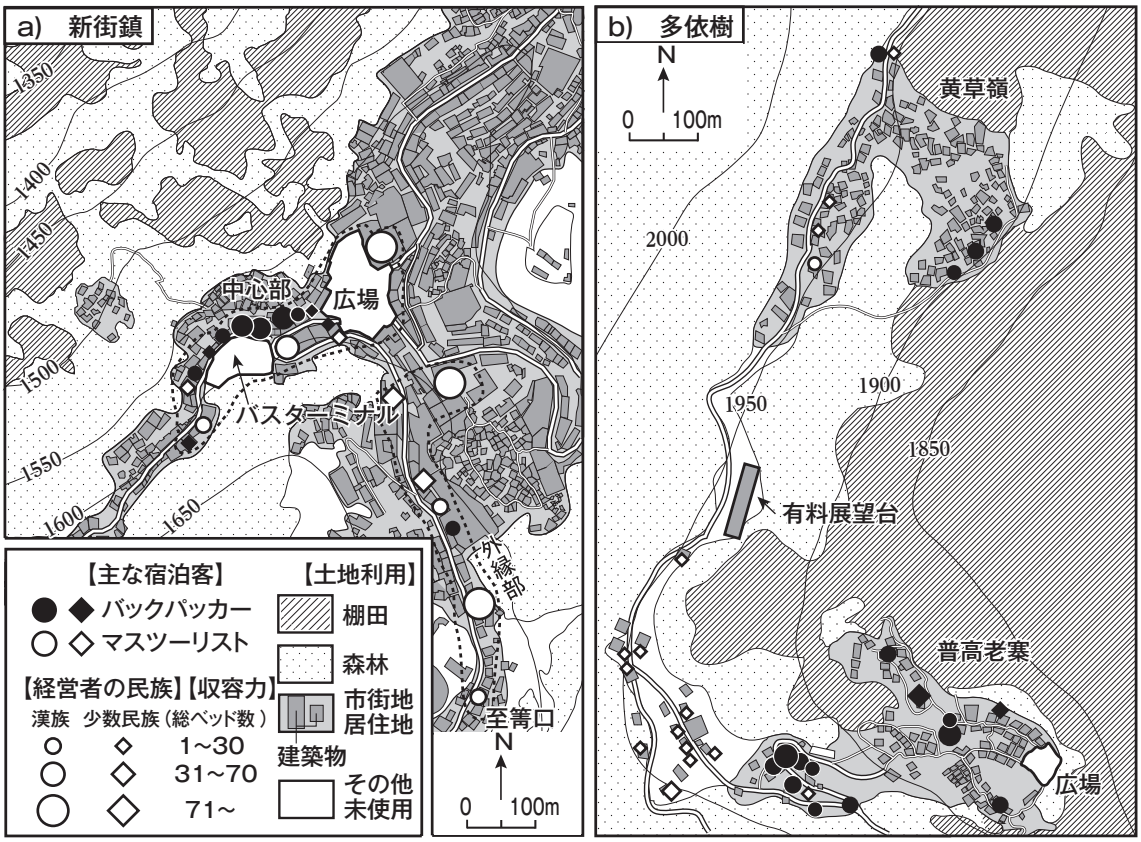

図 5　新街鎮・多依樹・普高老寨における土地利用と宿泊施設の分布

（等高線間隔は 50 m．土地利用は Google Earth 衛星画像判読および歩測により作成．宿泊施設は聞き取り調査により作成．この他，多依樹の有料展望台には旅行会社兼政府経営の宿泊施設が併設されているが，表示していない．）

なく，新街鎮中心部から南下する道路沿い（以下新街鎮外縁部）にも集積しはじめる．また，勝村の宿泊施設は，増加する団体ツアー客に対応しており地元出身のハニ族によって経営されている．

2009 年には，政府との郷鎮企業である旅行会社が設立され，観光開発が本格的に始動する．その結果，多依樹（Duoyishu）・老虎嘴（Laohuzui）・霸達（Bada）の 3 ヵ所に有料展望台が整備された．老虎嘴は夕日の撮影に適している一方，多依樹は朝日の撮影に適している．これを受けて 2010 年以降は，多依樹に宿泊施設が開業した．立地位置は，普高老寨（Pugaolaozhai），黄草嶺（Huangcaoling），有料展望台より南下した道路沿いの 3 ヶ所に集中している（図 5b）．道路沿いには，ハニ族が経営するマスツーリスト向けの宿泊施設が集積した一方，黄草嶺の棚田沿いおよび普高老寨では BP 向け宿泊施設が開業した．

（2）設備・サービス

BP は安価で快適水準の低い宿泊施設を好むとされていたが（Locker-Murphy and Pearce, 1995），近年の研究結果では，BP 向けの宿泊施設において様々な設備やサービスが要求されることが指摘されている．2006 年にアジアで一番評価が高かった BP 向け宿泊施設の評価理由を分析した Musa and Thirumoorthi（2010）によれば，設備・立地・フレンドリーさ・自宅のような雰囲気が重要であった．また，BP 向け宿泊施設の評価基準や好みは BP の属性（性別・年齢・国籍）などで異なる（Oliveira-Brochado and Gameiro, 2013）．

そこで，表1に新街鎮と多依樹におけるBP向け宿泊施設の設備・サービスの内容を示した．評価基準は，一般的なBP向け宿泊施設で提供されるサービスとして，オンライン予約，Wi-Fi，食事の提供，英語対応，ガイドとした．

その結果，新街鎮のほとんどの宿泊施設ではBP向けの設備・サービスは提供されていない．これらは主に自宅を改造した低廉な施設となっている．それに対し，多依樹のBP向け宿泊施設では，BP向けの設備・サービスが充実している．

オンライン予約は，Agoda，Trip Advisor，去哪儿网などのウェブサイトから可能である．通常の旅行者に比べて多くの国や地域を訪れるBPはガイドブックを携帯せずに旅行することが多く，目的地の情報検索や宿泊施設のオンライン予約をするために，Wi-Fiは必要不可欠なツールである．

新街鎮には独立した飲食店が複数あるが，多依樹には少ない．そのため，新街鎮のBP向け宿泊施設では食事が提供される宿泊施設は10軒中1件のみである．一方で，多依樹における大多数のBP向け宿泊施設では食事の提供が行われており，一般的な中華料理だけでなく西洋風の食事も提供されるため，観光者向けの飲食店としても利用されている．また，ハニ族が経営する一部の宿泊施設にも飲食店が併設されており，地元の料理が提供されている．

中国語が話せない多くの外国人BPが利用するのにもかかわらず，新街鎮における大多数のBP向け宿泊施設では英語対応が行われていない．ただし，経営者や従業員は外国人BPに慣れており，また外国人BPも中国では英語が通じない場面が多いことを理解しているため，問題が生じることは少ない．

表1　BP向け宿泊施設の設備・サービス別軒数（2015年）

設備・サービス	新街鎮（n=10）	多依樹（n=17）
オンライン予約	0	16
Wi-Fi	3	17
食事の提供	1	17
英語対応	2	16
ガイド	1	17

閉業・休業したものは含まない（表2・3も同じ）．
聞き取り調査により作成．

棚田の鑑賞に適している地点までは距離があることや，経営者および従業員に英語を話す者も少ないため，新街鎮の大多数のBP向け宿泊施設ではガイドのサービスは行われていない．したがって，BPはミニバスに乗って有料展望台を訪れるか，徒歩で新街鎮の南西に位置する龍樹壩（Longshuba）を訪れる（図3）．それに対し，多依樹のBP向け宿泊施設では，経営者による観光ガイドのサービスが提供されている．経営者はBPのニーズを熟知しており，有料展望台ではない穴場の観光スポットを案内・紹介している．

(3) 経営者と従業員

以下，元陽におけるBP向け宿泊施設の経営者及び従業員の特徴について，①経営者の民族と出身地（図4），②経営者の前職（表2）と経歴，③従業員の雇用状況（表3）に留意しながら記述する．

まず，経営者の民族と出身地をみると（図4），新街鎮中心部の経営者は元陽出身者で構成され，漢族が多い．一方で2010年以降は，多依樹にBP向け宿泊施設が集積した．経営者の多くは外部地域出身の漢族である．

次に，経営者の前職について述べる（表2）．元陽は，現在でも農業人口が90％以上を占める農業地域であるが，前職で農業に従事していた者は1名にとどまる．また，新街鎮の経営者10名のうち，観光に関連する職種に従事していた者は観光ガイドの1名に過ぎない．それに対し，多依樹では16名のうち宿泊施設関連が2名，観光ガイドが2名とわずかながら観光産業従事者が増加した．

しかしながら，観光と関連のない職業に従事していた者も多く存在する．そこで，BP向け宿泊施設を開業した契機について，多依樹の経営者4名を例に経歴を詳しく論じる．

【事例a】 2013年開業．経営者は海南省出身の30代男性．深圳で大手日系企業に勤めながら中国国内を旅する．その後会社を退職し，旅の途中で立ち寄って気に入った元陽でゲストハウスを開業した．

【事例b】 2014年開業．経営者は福建省出身の30代男性．大理と麗江で開業しているゲストハ

表 2　BP 向け宿泊施設経営者の前職別人数（2015 年）

職業	新街鎮（n=10）	多依樹（n=16）
運転手	3	0
観光ガイド	1	2
宿泊施設	0	2
小売業	2	0
会社員	1	1
学生	0	2
IT 関連	0	2
飲食店	1	0
工事作業	1	0
農業	1	0
カメラマン	0	1
銀行員	0	1
看護師	0	1
ヘッドハンター	0	1
無職	0	1
不明	0	2

多依樹には同一経営者による宿泊施設が 2 軒あるので，経営者数は 16 名である．聞き取り調査により作成．

ウスの 3 号店．農業に関心があり，中国の大学の農学部を卒業した後，日本で農業技術の研修を受けた．ゲストハウスを始めた理由は元陽の棚田や文化に関心があり，それらを守る使命を感じたためである．自ら棚田を保有し，地元住民と共同で農業活動に参加したり地元の小学校でボランティアとして教鞭をとったりしている．英語日本語ハニ語に堪能．

【事例 c】 2014 年開業．経営者は昆明出身の 20 代男性．北京の大学を卒業後，一年間世界を放浪した．その後，就業する意思もなく，麗江でゲストハウスを経営する叔父の勧めでゲストハウスを開業した．元陽で開業した理由は，①住みやすい気候であること，②これからチャンスがありそうなこと，③麗江や大理と異なり宿泊施設が少ないこと，④中国人よりも外国人の割合が多いことである．オフシーズンには，ゲストハウスを休業して東南アジアを旅行する予定である．2015 年には，2 号店を黄草嶺で開業した．

【事例 d】 2012 年開業．経営者は元陽出身のイ族 30 代男性．もともと雲南省を中心に 6 年間にわたって観光ガイドに従事してきたが，その際にフランス人カメラマンと知り合い，後に彼のアシスタントとして 4 年間世界各地を周遊した．

このように，多依樹の BP 向け宿泊施設の経営者には，BP 旅行や BP 向けの観光産業に従事した経験があり，元陽の憧れを抱いた者も少なくない．

表 3　BP 向け宿泊施設の従業員雇用状況別軒数（2015 年）

雇用形態	新街鎮（n=10）	多依樹（n=17）
家族・親族のみ	7	1
地元住民を雇用	1	12
外部出身者を雇用	0	2
地元＋外部雇用	0	1
地元＋家族親族	2	1

聞き取り調査により作成．

最後に，従業員の雇用状況をみると（表 3），新街鎮では家族や親族による経営が多く，地元住民を雇用しているのは 10 軒中 3 軒のみである．しかし，多依樹では大多数の宿泊施設で地元住民が雇用されている．ただし，多依樹の宿泊施設における地元出身の従業員で英語対応やガイドができる者はおらず，清掃などが主な仕事で，接客は経営者自ら行う場合が多い．

すなわち，元陽の BP 向け宿泊施設では，経営者・従業員および設備・サービスにおいて地域的差異が生じている．

5．BP 向け宿泊施設の立地が変化した要因

先述したように，2000 年から 2000 年代終盤までは新街鎮に元陽出身者による BP 向け宿泊施設が集積し，2010 年以降は棚田の鑑賞地点である多依樹に外部出身者が経営する BP 向けの宿泊施設が集積した．ここでは，多依樹に BP 向け宿泊施設が集積した要因について，世界遺産登録に伴う交通アクセスの向上と，BP の宿泊施設選択方法の変化（表 4）から論じる．

（1）世界遺産登録に伴う交通アクセスの向上

2013 年 6 月の世界遺産登録に伴う元陽中心部における観光施設および道路の配置の変化を図 3 に示した．主な変化は，新しい観光施設の建設と新道の開通である．

2011年7月の段階では，観光村が1ヵ所，有料展望台が3ヵ所設置されていた．世界遺産登録後の2015年12月に確認された新しく建設された観光施設は，ビジターセンター（兼チケット売り場）が箐口村（Qingkoucun）に設置され，元陽観光の拠点となった．さらに，観光村が多依樹・大魚塘（Dayutang）に，無料展望台が黄草嶺・麻栗寨（Malizhai）・全福庄（Quanfuzhuang）・箐口村の4ヵ所に建設された．

棚田観光の拠点となった箐口村への交通アクセスを良くするため，以下の新しい道路が開通した．

①省道214号線（S214）の新道．元陽県内における旧214号線は，南沙鎮―新街鎮―攀枝花郷（Panzhihuaxiang）―黄芽嶺郷（Huangyalingxiang）―黄草嶺郷（Huangcaolingxiang）―俄扎郷（Ezhaxiang）を通過していたが，旧道より西側に新道が開通した（図2）．

②省道214号線から箐口村に通じる道路．

③新街鎮の市街地北側から新街鎮の中心部を通らずに箐口村に通じる道路．

④有料展望台が設置されている多依樹～老虎嘴を結ぶ道路．

①，②の新道開通によって，省都の昆明およびベトナム国境の町である河口と元陽を結ぶ長距離バスのルートが変わり，棚田へのアクセスが向上した．新道開通以前の省都・昆明またはベトナム国境の河口発元陽行きの長距離バスは南沙鎮を経由した後，旧省道214号線を南下して新街鎮の中心に位置するバスターミナルを終点としていた．その後旅行者はミニバスなどに乗り換えて棚田を目指していた．一方新道開通以後の省都・昆明またはベトナム国境の河口発元陽行きのバスは，南沙鎮を経由した後県道102号線（X102）を北西に3km進み省道214号線を南下した後，②の新道を通って直接箐口村に乗り入れ，大魚塘や勝村などを経由しその後多依樹に寄った後，同じルートで箐口まで戻りそのまま旧省道214号線を北上して新街鎮のバスターミナルに停車するようになった．このように，新道開通によって多依樹の交通アクセスが向上した．

(2) BPの宿泊施設選択方法の変化

ここでは，2011年7～8月に新街鎮中心部に宿泊していた外国人BP11名（全員個人旅行）と，2015年12月に多依樹に宿泊していた16組のBP（中国人5組5名，外国人12組18名．1組は中国人と外国人のカップル）からの，宿泊施設の選択理由に関する聞き取り調査結果（表4）から，多依樹にBP向け宿泊施設が集積した要因を考察する．

表4　BPの宿泊施設選択理由別人数
（2011・2015年）

選択理由	新街鎮（n=11）	多依樹（n=16）
立地	3	5
宿泊料金	2	5
ウェブサイト情報	1	5
ガイドブック情報	6	4
客引き	1	2
BPからの紹介	1	2
部屋	1	0
その他	1	3

新街鎮は2011年7月，多依樹は2015年12月の聞き取り調査により作成．選択理由は複数回答．

Speed（2008）の調査結果[1]によれば，BPが宿泊施設を選択する際に重視することは，料金（28.3%），立地（24.8%），他のBPからの推薦（25.6%）である．先述したように，2011年7月当時，元陽観光の拠点は新街鎮中心部に位置するバスターミナルであり，外国人BPはバスターミナル到着後に宿泊施設を探した．彼（女）らの宿泊施設の選択理由は，ガイドブック（Lonely Planet）の情報，立地，宿泊料金（表4）である．2011年以前に刊行された*Lonely Planet China*では，新街鎮中心部のBP向け宿泊施設が紹介されており，半数のBPはガイドブックの情報に従っていた．一方，ガイドブックを携帯せずに旅行していたBPは，立地（バスターミナルから近く見つけやすい）がよく，宿泊料金が安価であることを重視し，新街鎮のバスターミナル周辺の宿泊施設（図5a）を利用した．このようなBPの宿泊施設の選択理由に一致した新街鎮中心部にBP向け宿泊施設が集積したと考えられる．

ところが，2015年12月の多依樹では，元陽到着前にAgoda，Trip Advisor，去哪儿网などのウェブサイトで口コミを見て（表4），そのままオンライン上から予約していた者が増加した．これは，近年の研究（Hannam and Butler, 2014；

O'regan, 2008；Paris, 2012）で指摘されるように，BP の旅行がインターネットの出現によって大きく変化したと考えられる．

先述したように，多依樹の BP 向け宿泊施設の経営者は，BP 旅行や BP 向けの観光産業に従事した経験から，BP の文化に精通している者が多い．そのため，経営者はウェブサイトを通じて宿泊施設の宣伝を行い，集客をしている．

多依樹における BP 向け宿泊施設の立地の良さとは他地域からの交通アクセスの良さだけでなく，観光する上での利便性（棚田の鑑賞地点が近いこと）や，伝統的なハニ族の村内に宿泊できることが評価されていた．また，宿泊料金も極端に安価な宿泊施設を希望するのではなく，旅の予算と照らし合わせながら，好みの宿泊施設を選択していた．このように，現代的 BP のニーズに応える宿泊施設が，多依樹に集積した．

6．結論

近年の BP は，低予算な長期旅行を行う伝統的な BP からインターネットを駆使し予算にこだわらない現代的な BP（flashpacker）へと移行しつつあるとされてきた．本研究は，中国雲南省元陽における BP 向け宿泊施設の変容について論じてきた．その結果は，表 5 のようにまとめられる．

中国雲南省の代表的な観光地と同様に，元陽は 1992 年に対外開放されると外国人 BP の目的地となった．2000 年から 2000 年代後半にかけては，バスターミナルが位置する新街鎮中心部に，伝統的な BP 向けの低廉な宿泊施設が集積した．それらの特徴は，経営者が元陽県出身の漢族であること，家族・親族経営であることが挙げられる．一方，2010 年代以降は，棚田の鑑賞地点である多依樹に，設備・サービスの充実を求める現代的な BP 向けの宿泊施設が集積した．これらの特徴は，大多数の経営者が外部地域出身者で構成されており，BP 旅行の経験者または BP 向けの観光産業に従事した経験があること，地元住民を従業員として雇用していることが挙げられる．

表 5　元陽における BP 向け宿泊施設の特徴

		新街鎮	多依樹
開業時期		2000 年代	2010 年以降
経営者	出身地	元陽県	外部地域
	民族	漢族	漢族
従業員		家族・親族	地元住民を雇用
設備・サービス		低廉	充実

多依樹に現代的 BP 向けの宿泊施設が集積した要因は以下の 2 点である．第一に，2013 年の世界遺産登録に伴う交通アクセスの向上である．省都・昆明またはベトナム国境の河口と元陽を結ぶ長距離バスは新街鎮中心部に位置するバスターミナルを拠点としていたが，世界遺産登録に合わせて新道が開通して以降，多依樹を経由するようになった．第二に，BP の宿泊施設選択方法の変化である．新街鎮の宿泊施設は，元陽到着後にバスターミナル付近で宿泊施設を探す BP に対応した．それに対し，多依樹における宿泊施設ではウェブサイトを通じて宣伝・集客をしている．

元陽における宿泊施設は，BP の変化に対応して変容してきた．その結果，伝統的 BP 向けと現代的 BP 向けが両立し，設備・サービスの質および経営者・従業員の出身地において地域的差異が生じた．

これまでの BP の観光とその従事者について論じた研究では，地域住民の雇用を創出した事例と，外部出身者の流入を招くという指摘がなされてきた．前者は，BP が快適水準の低い安価な宿泊施設を求めるため，資本を持たない地元住民でも宿泊施設経営に参入できた事例である．後者は，BP が宿泊施設に設備やサービスを要求するため，経営ノウハウや資本を有する外部出身者が流入した事例である．

元陽における宿泊施設は，前者の事例から後者の事例に移行しつつある段階であるといえよう．したがって，BP 向け宿泊施設の変容や BP 目的地（バックパッカー・エンクレーブなど）を研究する際には，観光産業関連施設だけでなく，BP の変化についても考慮する必要がある．■

【注】

1）32 国籍 374 名の BP を対象としたアンケート調査である．

【参考文献】

Ateljevic, I. and Doorne, S.（2005）Dialectics of Authenti-

cation : Performing 'Exotic Otherness' in a Backpacker Enclave of Dali, China, *Journal of Tourism and Culture Change,* 3(1) : 1-17.

Brenner, L. and J. Fricke (2007) The Evolution of Backpacker Destination : The case of Zipolite, Mexico, *International Journal of Tourism Research,* 9 : 217-230.

Britton, S. (1992) The Political Economy of Tourism in the Third World, *Annals of Tourism Research,* 9 : 331-358.

Cohen, E. (2003) Backpacking : Diversity and Change, *Journal of Tourism and Culture Change,* 1(2) : 95-110.

Dai, F. and Bao, J. (1996) The Social Impacts of Tourism : A Case Study in Dali, Yunnan Province, China, *Chinese Geographical Science* 6(2) : 132-144.

Donaldson, J.A. (2007) Development and Poverty Reduction in Guizhou and Yunnan, *The China Quartely,* 190 : 333-351.

Hampton, M. P. (1998) Backpacker Tourism and Economic Development, *Annals of Tourism Research,* 25 : 639-660.

――― (2003) Entry Points for Local Tourism in Developing Vountries : Evidence from Yogyakarta, Indonesia, *Geografiska Annaler,* 85B : 85-101.

Hannam, K. and G. Butler (2014) Flashpacking and Automobility, *Current Issues in Tourism,* 17(8) : 739-752.

黄紹文（2007）：哈尼梯田―千年労作対象到世界文化遺産的嬗変，諾瑪阿美到哀牢山―Naoqma Aqmeil Nei Hhaqlaol Haolgaoq Hevnei：哈尼族文化地理研究，雲南民族出版社，119-199.（＝稲村務訳（2011）ハニ族の棚田―千年の労作から世界文化遺産候補へ．地理歴史人類学論集，2，57-105.

石森秀三（1996）：観光革命と二〇世紀．石森秀三編，観光の二〇世紀―二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容，ドメス出版，11-26.

Jarvis, J. and V, Peel. (2010) Flashpacking in Fiji : Reframing the 'global nomad' in a developing destination, K. Hannam and A. Diekmann eds. *Beyond Backpacker Tourism : Mobilities and Experiences,* Bristol : Channel View Publications, 21-39.

角媛梅（2009）：哈尼梯田自然与文化景現生態研究．中国環境科学出版社，223p.

Locker-Murphy, L. and Pearce, L.P. (1995) Young Budget Travelers : Backpackers in Australia. *Annals of Tourism Research,* 28 : 50-67.

松村嘉久（2001）：中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略．東アジア研究，32，25-46.

Musa, G. and T. Thirumoorthi (2011) Red Palm : Exploring Service Quality and Servicescape of the Best Backpacker Hostel in Asia. *Current Issues in Tourism,* 14 (2) : 103-120.

Oliveira-Brochado, A. and C. Gameiro (2013) Toward a Better Understanding of Backpackers' Motivations, *Tékhne – Review of Applied Management Studies,* 11 : 92-99.

Oppermann, M. and K. S. Chon (1997) *Tourism in Developing Countries.* London : International Thompson Business Press, 173p.（＝内藤嘉昭訳（1999）途上国観光論．学文社，238p）

O'Regan, M. (2008) Hypermobility in Backpacker Lifestyles : The Emergence of the Internet Café, P. M. Burns and M. Novelli ed. *Tourism and Mobilities : Local Global Connections,* Wallingford : CABI, 109-132.

Paris, C. M. (2012) FLASHPACKERS : An Emerging Sub-Culture?. *Annals of Tourism Research,* 39(2) : 1094-1115.

Scheyvens, R. (2002) Backpacker Tourism and Third World Development. *Annals of Tourism Research,* 29(1) : 144-164.

Sørensen, A. (2003) Backpacker ethnography, *Annals of Tourism Research,* 30(4), 847-867

Speed, C. (2008) Are Backpackers Ethical Tourists?, K. Hannam and I. Ateljevic, *Backpacker Tourism : Concepts and Profiles*, ed. Clevedon : Channel View Publications, 54-81.

須藤廣（2008）：観光化する社会―観光社会学の理論と応用，ナカニシヤ出版．192p.

Visser, G. (2003) The Local Development Impacts of Backpacker Tourism : Evidence from the South African Experience. *Urban Forum,* 14(2-3) : 264-293.

Vogel, J. (2003) Terrace and Tourism : Development in Yuanyang. *Tourism and Development in Yunnan* : Yunnan Fine Arts Publishing House, 148-173.

王君正（2009）：区域旅游創新．昆明：雲南人民出版社，198p.

安村克己（2011）：マス・ツーリズムの出現とその弊害．安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編，よくわかる観光社会学，ミルネヴァ書房，20-23.

横山智（2007）：途上国農村におけるバックパッカー・エンクレーブの形成―ラオス・ヴァンヴィエン地区を事例として．地理学評論，80(11)，591-613.

【参考資料】

UNESCO HP (http://whc.unesco.org/en/list/1111/, 2016.11.3)

Transformation of Backpacker Guesthouse in Yuanyang, Yunnan, China

ITAGAKI Takeru

Since the economic open and reform enforced in China, peripheral region such as Yunnan Province became popular destinations to foreign backpackers. Located in southern Yunnan Province, terraced paddy fields and ethnic culture of Hani and Yi has been recognized as local tourism resources in Yuanyang. Tourism developed as early as in 1992 in Yuanyang, and the initial tourists were limited backpackers. In 2013,Yuanyang's terraced paddy fields was registered as a World Heritage Site.

From 2000 to late 2000s-, guesthouses for backpackers were opened in the central area of Xinjiezhen near the bus terminal station. Since 2010s, guesthouses for backpacker accumulated in Duoyishu village, where is a convenient photo spot of terraced paddy fields.

The characteristics of guesthouses for backpackers in Xinjiezhen are as followed: operated by local Han people, mainly managed by the family or relatives without hiring employees, facilities and service are simple. On the contrary, the characteristics of guesthouses for backpackers in Duooyishu are as followed: operated by Han people from other areas, employs many local people, offered high quality facilities and service experience for backpacker's.

The factors to change the location of accommodation can be concluded in two points as followed. First, new roads opened with taking advantages of the registration as a World Heritage Site. From then on, the buses from Kunming and Hekou to Yuanyang directly run to Duoyishu before the bus terminal in Xinjiezhen. Second, Backpacker's way of accommodations choice was changed. The majority of backpackers who stayed in accommodations in Douyishu had done some studies through the reviews by the hostel booking websites before they arrived Yuanyang and had booked the room online from the same websites.

In that way, in Yuanyang, at the initial stage of tourism, the people from Yuanyang at the center of Xinjiezhen opened the low-priced accommodations suitable for backpackers. Later in Douyishu, the accommodations in high quality for backpackers were opened by the people from outside who were familiar with backpackers' cultures. As a result, the backpackers' tourism in Yuanyang proceeds bipolarization of the service quality, business owner and employees by different areas.

Keywords: Backpacker, Guesthouse, Terraced Paddy Fields, World Heritage Site, Yuanyang